



平成29年度 第2回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成30年1月~6月)のポイント

海況

黒潮はA型で推移する。沿岸水温は、潮岬以西で「平年並」～「やや低め」、熊野灘～伊豆諸島北部海域～房総沖は「平年並」～「高め」、鹿島灘～常磐南部海域は「平年並」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

※2 平年並＝平年値±0.5℃程度、やや低め＝平年値-1.0℃程度、
低め＝平年値-1.5℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マイワシ

豊後水道以西では前年を下回り、宿毛湾以東では前年を上回る海域が多い。

カタクチイワシ

前年を下回る海域が多い。

ウルメイワシ

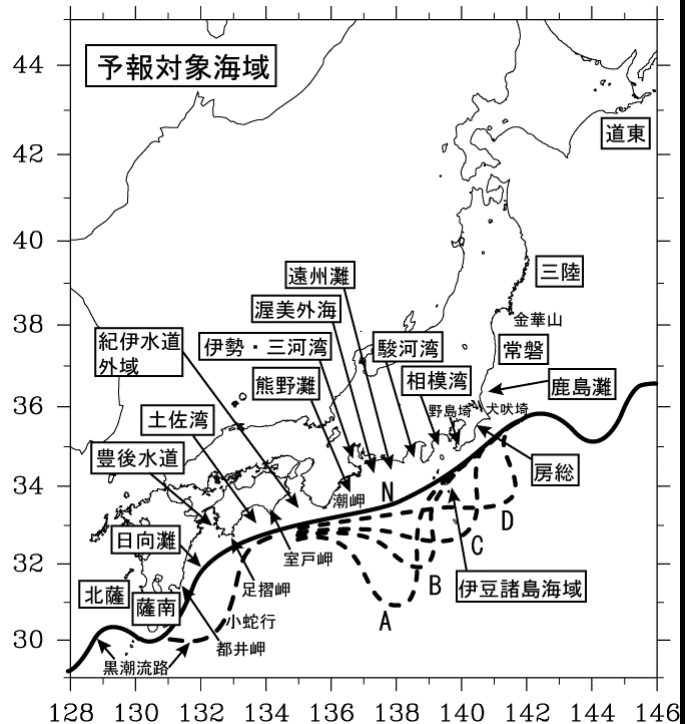
海域によって異なるが、全体としては前年並。

マアジ

前年並～上回る海域が多い。

マサバ・ゴマサバ

マサバは熊野灘以西では前年を上回る海域が多く、伊豆諸島以北では前年並。
ゴマサバは前年並～下回る海域が多い。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所

担当：業務推進部 野上、市橋

漁況：資源管理研究センター 錢谷、古市、上村、入路、亘、由上

海況：海洋・生態系研究センター 杉崎、清水

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2018年1月～6月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、接岸傾向で推移し、5月頃から離岸する。
- ・足摺岬沖では、接岸傾向で推移する。
- ・潮岬沖では、離岸傾向が持続する。

◎潮岬以東

- ・A型で推移し、伊豆諸島海域付近を北上する。
- ・房総沖では、接岸傾向で推移し、一時的に離岸する。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・都井岬～足摺岬沖では、黒潮の離接岸変動による影響は少ない。
- ・室戸岬～潮岬沖では、黒潮からの暖水が波及することがある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域では、黒潮内側反流が一時的に強くなり、暖水が波及する。しかし、継続的な波及はみられない。暖水波及がない時には、冷水域に覆われることもある。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね暖水域に覆われる。
- ・房総沖では、暖水が波及しやすい。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮の変動に伴い暖水が波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」～「やや低め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。遠州灘～伊豆諸島北部海域では、暖水が波及して一時的に「極めて高め」となることもある。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね「高め」で推移する。
- ・房総沖は、「平年並」～「やや高め」で推移する。
- ・鹿島灘～常磐南部海域は、「平年並」で推移するが、暖水波及時には「やや高め」となる。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過 (2017年7月～12月) (注:経過は図2を参照のこと)

(1) 黒潮

- ・7月上旬、冷水域が伊豆諸島海域に移動し、C型となった。
- ・8月中旬、小蛇行が潮岬沖を通過し、熊野灘沖で蛇行が発達し始めた。伊豆諸島海域では先行する冷水域が残存していて、W字状の流路となった。
- ・8月下旬、遠州灘沖での蛇行南端は北緯32度以南となり、大蛇行となった。
- ・9月上旬、W字状の流路が東に移動し、伊豆諸島の西側で北上して八丈島付近を流れ、伊豆諸島の東側で南下する流路となった。
- ・9月中旬、房総沖では接岸し、A型となった。
- ・10月下旬、蛇行の北上部が東に移動し、八丈島が冷水域に入った。
- ・11月中旬、蛇行の北上部が西に移動し、八丈島付近を北上する流路となった。
- ・8月中旬以降、潮岬沖では離岸が続いた。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、7月は屋久島南付近の平均的な位置、8月～11月は接岸で推移した。
- ・10月中旬～下旬、暖水域に覆われていた。

◎潮岬以西

- ・7月上旬、都井岬沖の小蛇行が東進を始め、都井岬沖の黒潮は接岸し始めた。
- ・8月中旬以降、小蛇行の明確な東進はみられない。

◎潮岬以東

- ・7月上旬～中旬、伊豆諸島北部海域から遠州灘へ暖水が波及し、小暖水渦となって停滞した。
- ・8月中旬、小蛇行の北上部から熊野灘へ暖水が波及し、熊野灘は暖水域に覆われた。
- ・8月中旬～下旬、相模湾～伊豆諸島北部海域は冷水域に覆われた。
- ・9月下旬～10月中旬、伊豆諸島北部海域から遠州灘へ暖水が波及し、その南に冷水域がみられた。
- ・10月下旬～11月上旬、伊豆諸島北部海域から熊野灘へ内側反流がみられた。
- ・11月中旬～下旬、熊野灘～遠州灘では暖水の影響が弱まった。
- ・12月上旬、南方から熊野灘に暖水が波及し、一時的に小暖水渦が形成された。
- ・伊豆諸島南部海域は、7月上旬～8月中旬は概ね冷水域に覆われた。その後は、10月下旬～11月上旬に冷水域に覆われたのを除き、概ね黒潮が付近を流れ、暖水域に覆われていた。
- ・房総沖での黒潮は、8月中旬～9月上旬まで大きく離岸した。それ以降は、概ね接岸傾向で推移した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・7月～11月中旬、沿岸域では常磐南部海域の一部に冷水の影響がみられた。沖合域では黒潮系暖水の影響がみられ、特に9月は暖水の影響が強かった。
- ・11月下旬以降、沿岸域に暖水の影響がみられた。

現況 (2017年12月19日現在)

(1) 黒潮

- ・ A型流路である。
- ・ 潮岬沖から大きく蛇行した後、伊豆諸島海域を北上している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬～室戸岬沖で「やや離岸」、潮岬沖で「かなり離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 伊豆諸島北部海域へ暖水の波及がみられる。
- ・ 黒潮は、房総沖で接岸している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 黒潮系暖水の影響が見られる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

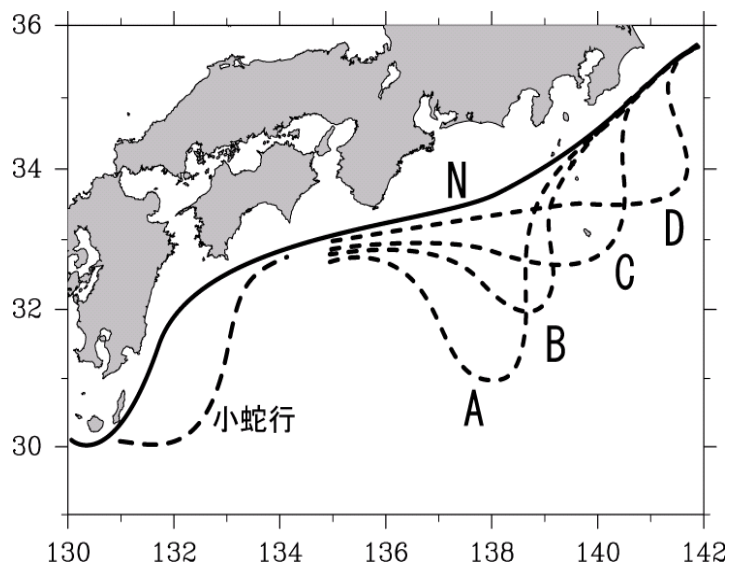


図1 黒潮流型の分類

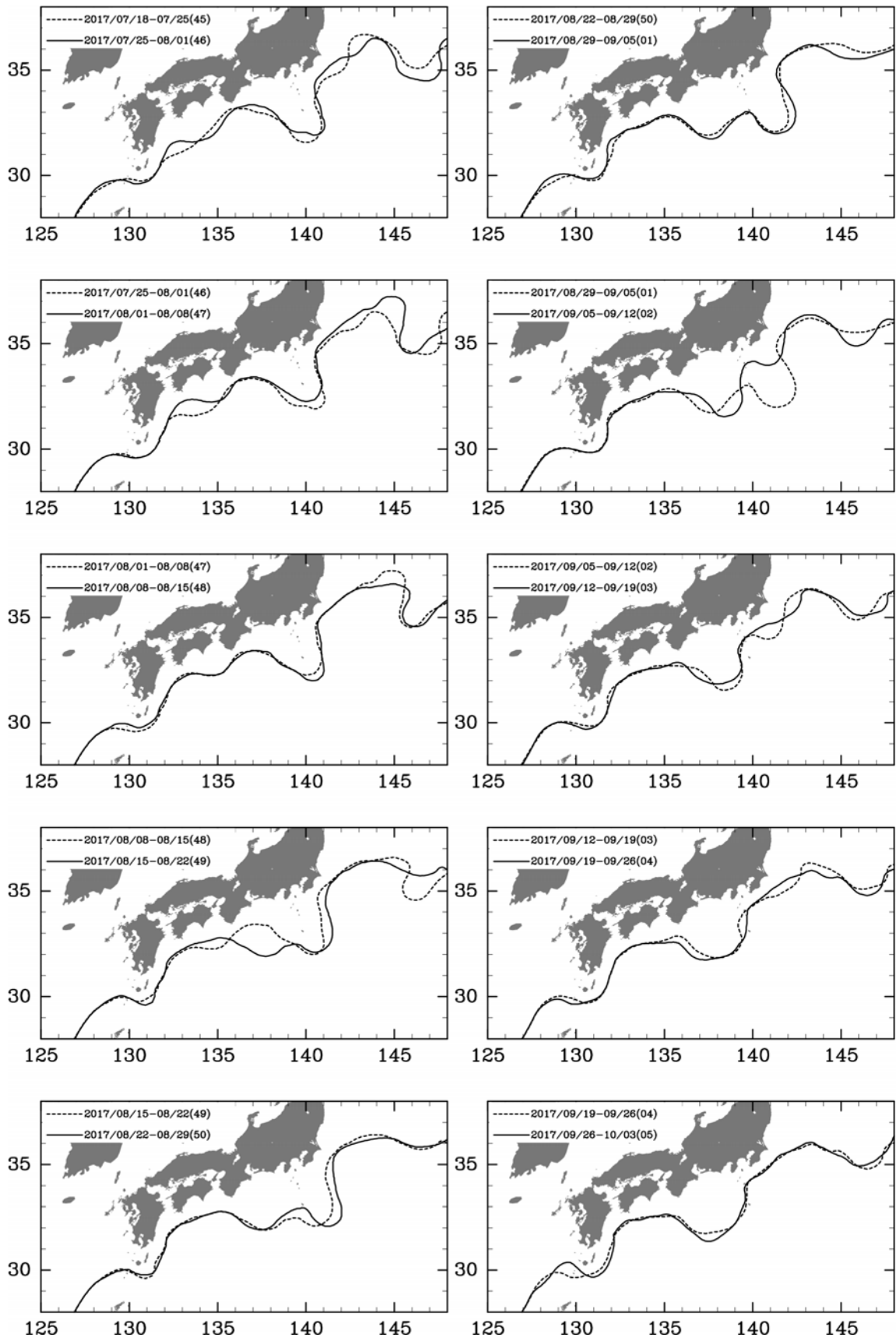


図2 黒潮流軸のパターン

(2017年7月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

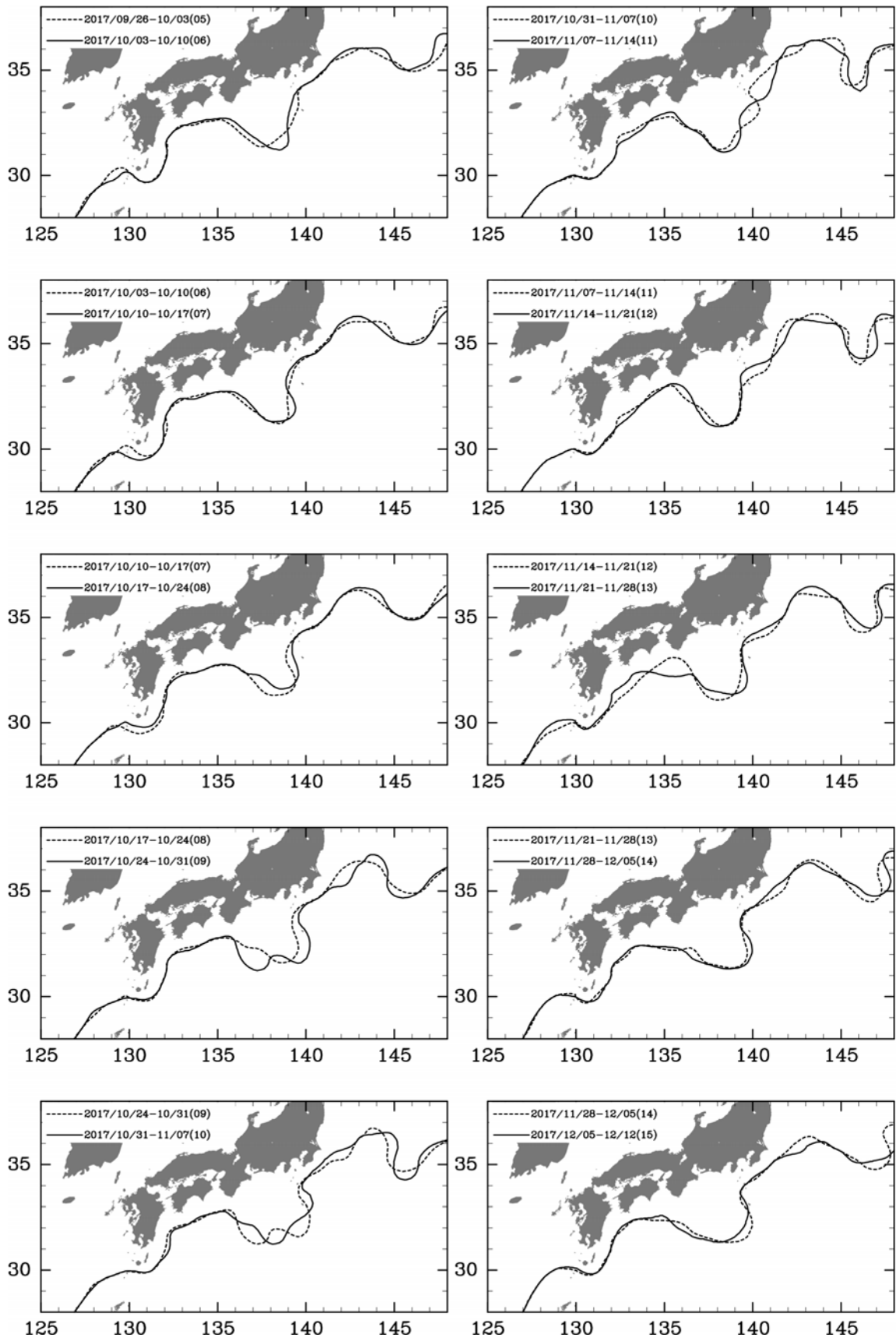


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2017年7月~12月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2018（平成30）年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2018（平成30）年級群）、1歳魚（2017（平成29）年級群）、
2歳魚（2016（平成28）年級群）、3歳魚（2015（平成27）年級群）、
4歳魚（2014（平成26）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～豊後水道南部では前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では前年を上回る。紀伊水道外域西部では前年並。紀伊水道外域東部～熊野灘では前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：北薩～豊後水道南部では、期前半は15 cm～20 cm前後（1歳以上）、期後半は7 cm～12 cm前後（0歳魚）主体。宿毛湾～紀伊水道外域は12 cm～19 cm（1歳魚）主体に17 cm以上（2歳魚）と15 cm未満（0歳魚）も漁獲される。熊野灘では12 cm～19 cm（1歳魚）と17 cm以上（2歳以上）主体。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では前年を上回る。駿河湾、相模湾西部では前年並～下回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期：伊勢・三河湾、渥美外海では6月以降、駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では10 cm以下（0歳魚）主体。駿河湾、相模湾西部では18 cm以上（2歳以上）主体に15 cm～16 cm（1歳魚）、15 cm未満（0歳魚）も混じる。相模湾東部では13 cm～15 cm（1歳魚）主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は房総海域～常磐海域、2月～5月は房総海域～鹿島灘、6月は房総海域～三陸南部海域で形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において2月まで、および5月以降に入網がみられる。

(3) 魚体：12 cm～18 cm前後（1歳魚）、17 cm～20 cm前後（2歳魚）、18 cm～21 cm前後（3歳魚）、20 cm以上（4歳魚）。

漁況の経過（2017年7月～11月）および見通し（2018年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、2010年～2014年に比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。さらに2015年の極めて高い加入量および2016年の高い加入量により資源量は増加し、2016年は212万トンと推定された。

2014年級群（4歳魚）は、平成29年度資源評価において、加入量が160億尾と推定されており、最近10年（以下、近年）において高い値となっている。前漁期（2017年7月～11月）における漁獲状況も前年を大きく上回っており、高い豊度を示している。残存資源は2013年級群の同時期を上回っていると考えられ、今期も引き続き漁獲対象になると見込まれる。

2015年級群（3歳魚）は、加入量が403億尾と推定されており、極めて高い値となっている。前漁期における2歳魚としての漁獲状況も、好調であった前年同期を上回った。以上から、残存資源は2014年級群

の同時期を上回ると考えられる。

2016年級群（2歳魚）は、加入量が229億尾と推定されており、2015年級群には及ばないものの高い値となっている。残存資源は2015年級群の同時期を下回るものの、高い水準にあると考えられる。

2017年級群（1歳魚）は、資源評価の将来予測において加入量が97億尾と推定され、近年の高い水準を維持するが2016年級群を下回ると予測された。しかしその後、9月～10月の秋季浮魚調査（中央水研）において、マイワシ0歳魚が多く漁獲され、CPUE中央値は前年を大きく上回った。マシラスや幼魚～未成魚として東日本の各地で多く漁獲されていることも踏まえ、資源評価時の推定値を上回る可能性がある。

2018年級群（0歳魚）については現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では、4月まで1歳魚（2017年級群）、5月以降は0歳魚（2018年級群）が漁獲の主体となるが、2017年級群の漁獲量は、4月の発生以降、低調に推移していることから、来遊量は前年を下回る。

日向灘では、5月まで1歳以上、6月は0歳魚が漁獲の主体となる。今期の1歳以上の漁獲動向と一致する前漁期の三重県・高知県・鹿児島県のまき網漁獲量は前年を下回っているため、今期の来遊量は前年を下回る。

豊後水道南部では、3月まで1歳魚、2歳魚、4月以降0歳魚が漁獲の主体となるが、2017年級群の漁獲量は低調に推移していることから、来遊量は前年を下回る。

宿毛湾、土佐湾では、1歳魚が漁獲の主体となるが、これまで2017年級群の来遊量は前年を下回っている。一方で、潮岬沖の黒潮流軸は離岸傾向で推移する予測となっており、潮岬以東からの産卵親魚の加入が良好となり、1歳以上の来遊量が好転する可能性がある。前年同期の来遊量は低調であったことから、今期の来遊量は前年を上回る。

紀伊水道外域西部では、0歳魚が漁獲の主体となる。そのため現段階での来遊量の予測は困難であるが、近年の漁獲傾向から前年並。

紀伊水道外域東部では、1歳魚が漁獲の主体となる。1歳魚まき網、定置網ともに2017年は低調に推移したが、船びき網によるマシラスの混獲率は高かった。また、潮岬沖の黒潮流軸の離岸傾向が継続すると予測されているため、本海域のまき網漁場の海水温は低下し、マイワシの滞留条件としては良いと考えられる。本系群の資源状態が上向きであることから、来遊量は前年を上回る。

熊野灘では、1歳以上が漁獲の主体となる。春季の熊野灘の漁獲量と太平洋系群の3歳以上の資源量とは正の関係が認められ、太平洋系群の3歳以上の資源量が前年を上回っていることから、来遊量は前年を上回る。また、近年では冬季に1歳魚、2歳魚の産卵回遊もみられる。前漁期の夏秋季の0歳魚は不漁であり、1歳魚の来遊は前年を下回る可能性があるが、前年の1歳魚として好漁であった2歳魚は今期もまとまった来遊が期待できる。以上から、全体としての来遊量は前年を上回る。

・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：北薩～豊後水道南部では、期前半は15cm～20cm前後の1歳以上、期後半は7cm～12cm前後の0歳魚が主体となる。宿毛湾、土佐湾、紀伊水道外域では12cm～19cmの1歳魚主体に、17cm以上の2歳以上および、15cm未満の0歳魚も漁獲される。熊野灘では12cm～19cmの1歳魚と17cm以上の2歳以上が漁獲される。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では、6月以降0歳魚（2018年級群）が主体となる。遠州灘西部に暖

水の波及があると予測されており、マシラスの生き残りや成長に有利な海況になることが期待されることから、来遊量は前年を上回る。

駿河湾、相模湾西部では、2歳（2016年級群）以上が主体となり、1歳魚（2017年級群）および0歳魚が混じる。2016年級群、2017年級群は比較的高豊度と推定されており、高い来遊量が見込まれるが、前年同期の本海域への来遊水準が極めて高かったため、今期の来遊量は前年並～下回る。

相模湾東部では、1歳魚が漁獲の主体となる。夏以降、相模湾を含む太平洋側各海域で、2017年級群の漁獲が好調に推移しており、1歳魚の来遊量は前年を上回る。一方で、前年同期には大羽イワシの来遊があり漁獲量が増加したが、2歳魚、3歳魚の相模湾への来遊は海況次第であり、その予測は難しい。以上を踏まえ、全体としての来遊量は前年並。

・漁期：伊勢・三河湾、渥美外海では6月以降、0歳魚が漁獲される。駿河湾、相模湾では期を通じて漁獲される。

・魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では10cm以下の0歳魚が主体となる。駿河湾、相模湾西部では18cm以上の2歳以上が主体となり、15cm～16cmの1歳魚、15cm未満の0歳魚が混じる。相模湾東部では13cm～15cmの1歳魚が主体となる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚（2017年級群）、2歳魚（2016年級群）、3歳魚（2015年級群）および4歳魚（2014年級群）。2014年級群は、加入量が近年において高く推定されており、前漁期の3歳魚としての漁獲状況も前年を大きく上回っていた。2015年級群は、極めて高い加入量と推定されており、前漁期の2歳魚としての漁獲状況が、好調であった前年を上回った。2016年級群は、2015年級群には及ばないものの、高水準な加入と推定されている。2017年級群は、調査船調査の結果などから加入水準が高いと期待される。以上から、全体としての来遊量は前年を上回る。

・漁期・漁場：まき網の漁場は、1月は房総海域～常磐海域、2月～5月は房総海域～鹿島灘、6月は房総海域～三陸南部海域で形成される。定置網は、仙台湾～三陸南部海域において2月まで、および5月以降に入網がみられる。

・魚体：1歳魚は12cm～18cm前後、2歳魚は17cm～20cm前後、3歳魚は18cm～21cm前後、4歳以上は20cm以上。まき網では、1月は3歳魚、4歳魚、2月～3月は2歳魚、4月～5月は2歳魚～4歳魚が主体。6月には、1歳魚～4歳魚が漁獲される。定置網では、1歳魚主体に、2歳魚、3歳魚が混じる。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2018（平成30）年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2018（平成30）年級群）、1歳魚（2017（平成29）年級群）、
2歳魚（2016（平成28）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南海域、日向灘、豊後水道では前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では前年並。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：11 cm以下の1歳魚主体。

2. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾、渥美外海では前年並。駿河湾、相模湾西部では前年並～下回る。相模湾東部では前年並。

(2) 漁期：伊勢・三河湾、渥美外海では5月以降に、駿河湾では散発的に、その他の海域では期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海では8 cm以下の0歳魚主体。その他の海域では11 cm以下の1歳魚主体。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総・常磐海域、三陸南部海域では前年を下回る。三陸北部海域、道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：まき網は房総海域～鹿島灘で期を通じて漁獲される。三陸南部海域の定置網は2月までと5月以降。

(3) 魚体：8 cm～11 cmの1歳魚主体。

漁況の経過（2017年7月～11月）および見通し（2018年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の推定資源量は1998（平成10）年から2009（平成21）年まで70万トン～150万トンで推移した。2010（平成22）年以降減少傾向を示し、2016（平成28）年の資源量は19万トンと推定された。資源水準は低位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2016年級群（2歳魚）は、2016年の西日本海域や秋季の房総沿岸2そうまき網漁業における0歳魚としての漁獲量が前年を上回ったものの、2016年6月の道東海域流し網調査（釧路水試）では、0歳魚は採集されなかった。2016年11月～2017年6月までの常磐房総海域での11 cm以下（1歳魚主体）の漁獲量は4.0千トンで、1999年以降最低であった。沖合域における調査船調査では、2017年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）および秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）で採集された1歳魚と想定される個

体の推定現存尾数、有漁点 CPUE が前年を下回る低い水準であった。以上の状況から、2016 年級群は低水準であり、今後もほとんど漁獲対象とならないと考えられる。

2017 年級群（1 歳魚）は、2017 年下半期のシラス漁況におけるカタクチシラス漁獲量が前年を大きく下回った。ただし、黒潮大蛇行による影響で、カタクチシラス漁獲量が減少した可能性がある。0 歳魚を主対象とする秋季の房総沿岸 2 そうまき網漁業の 2017 年漁獲量および西日本海域における 0 歳魚の漁獲量は前年を下回った。2017 年 6 月の道東海域流し網調査（釧路水試）において 0 歳魚は採集されなかった。沖合域の調査船調査では、2017 年のサンマ調査（東北水研、6 月～7 月）および秋季浮魚調査における 0 歳魚と想定される個体の推定現存尾数、有漁点 CPUE は低い水準であった。以上の状況から、2017 年級群は最近 10 年の中で見れば低水準と考えられる。

2018 年級群（0 歳魚）は、現時点ではその水準を予測できない。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

北薩、薩南海域では、1 月～3 月は前年春季発生群、4 月以降は前年秋季発生群が漁獲の主体となる。前年春季発生群の 2017 年 11 月までの漁獲量は低調で、前年秋季発生群を対象とする 2017 年秋季シラス漁は前年並であったことから、総じて前年を下回る。日向灘では、近年、上半期のまき網漁況と、前年 10 月～12 月の宿毛湾の中型まき網による漁獲動向に同じ傾向がみられる。2017 年 10 月～11 月の宿毛湾の中型まき網による漁獲量は前年を下回ったため、今期は前年を下回る。豊後水道西側では、今期の漁獲の主体となる 1 歳魚（2017 年級群）が、2017 年 7 月～11 月の漁況で前年を下回っていることから、前年を下回る。豊後水道東側では、豊後水道外海から来遊すると考えられる 2 歳魚（2016 年級群）の資源量が前年（2015 年級群）を下回っていると評価されており、周辺海域で発生した 1 歳魚（2017 年級群）が前年同期を下回っていることから、前年を下回る。宿毛湾、土佐湾では、2017 年漁期の宿毛湾の小型まき網による稚魚「かえり」の漁況は前年を下回っているものの、2017 年 10 月以降漁況が上向いていることから、不確実性は高いものの、前年並。紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲はない。

(2) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

冬季に熊野灘に来遊する大型成魚は、房総・常磐海域から回遊を行う群れであると考えられる。2017 年の秋季浮魚調査（中央水研、9 月～10 月）による分布状況や 12 月上旬の東北沖の水温が高めで推移していることから、今期はほとんど漁獲の対象とはならず、まとまった漁獲はない。伊勢・三河湾、渥美外海では、沖合回遊群が低水準で周辺海域から来遊する 1 歳以上は少なく、漁獲の主体は春季に漁獲対象となったカタクチシラスから成長した 0 歳魚（2018 年級群）と考えられるため、主な漁期は 5 月以降で、来遊量は前年並。駿河湾、相模湾西部では、1 歳魚（2017 年級群）および 2 歳魚（2016 年級群）の資源量が低水準と推定されていることから、来遊量は前年並～下回る。駿河湾では散発的に、相模湾西部では期を通じて漁獲される。相模湾東部では、沖合域から来遊する 1 歳魚（2017 年級群）、2 歳魚（2016 年級群）の資源水準は低いものの、沿岸域の 1 歳魚（2017 年級群）の来遊が期待できることから、

前年並と考えられる。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

房総・常磐海域では、例年、2歳魚主体の大型成魚と1歳魚主体の小型成魚が漁獲対象となる。前年漁期の小型成魚が翌年に大型成魚となって来遊すると考えられており、2016年11月～2017年6月の房総・常磐海域における1歳魚（2016年級群）主体と想定される11cm以下の小型魚の漁獲量（千葉県、茨城県、福島県の合計）は4.0千トンで、前年同期（6.0千トン）を下回った。房総以北の海域で、例年2月頃まで漁獲の主体となる12cm以上の大型成魚の来遊量は、直近の漁況から判断して非常に少ない。0歳魚を主対象とする秋季の房総沿岸2そうまき網漁業による2017年漁獲量は前年を下回ったことから、小型成魚の来遊量も前年を下回ると予測される。また、2017年の秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）において、0歳魚（2017年級群）と想定される個体の有漁点CPUEは非常に低い水準であった。以上から、まき網では、小型成魚を主体に房総海域～鹿島灘で漁場が形成されるが、来遊量は低調であった前年を下回る。

仙台湾～三陸南部海域の定置網では、2月まで南下群が、また5月以降に房総・常磐海域からの北上群の一部が来遊し、2歳魚および1歳魚が漁獲される。今期は1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となるが、資源水準が低いと考えられることから、来遊量は前年を下回る。

三陸北部海域、道東海域への今期の来遊は少なく、定置網でのまとまった漁獲はない。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2018（平成30）年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2018（平成30）年級群）、1歳（2017（平成29）年級群）以上。
年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：豊後水道西側では前年を上回る。

北薩・薩南、日向灘、宿毛湾・土佐湾、紀伊水道外域東部では前年並。

豊後水道東側、紀伊水道外域西部、熊野灘では前年を下回る。

全体としては前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：前半は1歳魚（11 cm～20 cm）が主体であり、後半に0歳魚（11 cm以下）が加入する。

漁況経過（2017年7月～11月）および見通し（2018年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源状態について、産卵調査に基づく産卵量と、半年単位のコホート解析により計算した資源量から、水準と動向を判断した。漁獲の大部分を占める宮崎県～三重県の漁獲量は増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にあり、2011年～2016年は過去最高水準となった。1978年以降の産卵調査に基づいて求めた日向灘～潮岬（海区III）の年間産卵量は、長期的に増加傾向にあり、2016年の産卵量（134兆粒）から、資源水準は高位と判断した。最近5年間（2013年～2017年）の資源量は99千トン～160千トンの範囲にあり、その推移から、資源動向は横ばいと判断した。コホート解析では、半期（1月～6月、7月～12月）単位で寿命24月齢までの4期とし、0月齢～5月齢（0歳）を1期、6月齢～11月齢（0歳）を2期、12月齢～17月齢（1歳）を3期、18月齢～23月齢（1歳）を4期とした。産卵量は長期的に増加傾向にあり、最近年は中位～高位水準を保っている。さらに、2007年以降の資源量、親魚量、加入量は、増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にある。これは、再生産が順調に行われていることを示唆しており、最近年の漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

2018年前期（1月～6月）は1歳魚（2017年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2017年後期（7月～11月）の漁況等から、1歳魚の来遊量を予測した。2018年前期（1月～6月）の後半には0歳魚（2018年級群）が加入するが、現時点での予測は困難である。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量には、強い正の関係がある。一方、後期（7月～11月）水揚量と翌年前期（1月～6月）水揚量にも、弱いながらも統計的には有意な正の関係がある。2017年後期（7月～11月）の水揚量は22千トンであった。2000年～2016年の後期（7月～11月）水揚量と翌年前期（1月～6月）水揚量の関係を用いて、2018年前期（1月～6月）の水揚量は10千トンと予測された。この値は、2017年前期（1月～6月）の88%に相当する。よって、2018年前期（1月～6月）の来遊量は、海域全体としては前年並となる。

北薩および薩南海域では、1歳魚（17 cm～20 cm）主体で、5月以降は0歳魚（7 cm～10 cm）が混じる。今期に主体となる1歳魚の漁況は、9月まで堅調に推移している。10月は前年を下回ったものの、11月は前年を上回っており、期全体では前年並の漁模様となっていることから、来遊水準は前年並と考えられる。

日向灘では、1月～4月は1歳魚以上（18 cm～20 cm）、6月は0歳魚が主体となる。1月～4月に主体と

なる1歳魚以上は、鹿児島県主要4港の前年後期（7月～12月）の漁況と関係がある。2017年7月～11月の鹿児島県の水揚量は前年並であることから、来遊量は前年並と考えられる。

豊後水道西側では、1月～3月は1歳魚（15 cm～20 cm）、4月～6月は0歳魚（10 cm前後）が主体となる。1月～3月に漁獲の主体となる1歳魚は、2017年4月～11月のまき網水揚量が前年比131%であったことから、来遊水準は前年を上回る。

豊後水道東側では、1歳魚（15 cm～20 cm）、0歳魚（5 cm～10 cm）が主体となる。本海域において、産卵親魚になり得る1歳魚の水揚量が前年同期を下回っていることから、来遊水準は前年を下回る。

宿毛湾および土佐湾では、1歳魚（16 cm以上）が主体となり、後半には0歳魚も混じる。今期に主体となる1歳魚の2017年7月～11月の来遊水準は前年並で推移した。また、宿毛湾中型まき網における1月～6月の水揚量は、前年7月～11月の中型まき網の水揚量と正の関係にある。この関係から予測される水揚量は前年同期の107%となるため、来遊水準は前年並。

紀伊水道外域西部では、前年を上回った7月と前年並の9月を除いて、まとまった漁獲はなかった。近年の漁獲は低調に推移していることから、1歳魚の来遊水準は前年同期を下回る。

紀伊水道外域東部では、2012年～2015年に好調に推移してきた1そうまき網の水揚量が2016年、2017年と続けて低調となった。定置網、棒受網での水揚量も、2016年、2017年は低調になっている。このような来遊状況は継続すると考えられ、来遊量は低調であった前年並。

熊野灘では、1歳魚（11 cm～20 cm）および2歳以上（20 cm以上）が主体となる。近年の熊野灘では冬春季に成魚の産卵回遊がみられ、高水準の漁獲が続いている。一方、産卵群の来遊には熊野灘沿岸への暖水波及の影響が示唆されており、産卵盛期である冬春季に暖水波及がないと不漁になる可能性がある。そのため、産卵回遊を行う成魚の来遊量および海況が、漁況に大きな影響を与えられ、前年冬春季には1歳～4歳魚が主体となり、春季には23 cm以上の3歳魚、4歳魚がまとまって漁獲されていること、前年の1歳魚は前々年の1歳魚と比べると漁獲が低調であることから、主体となる大型成魚の来遊量は前年並～下回ると考えられる。また、一部が産卵群に加わると想定される明け1歳魚は、前期の漁況から前年より少ないと考えられ、産卵に加わる1歳魚も前年より少ないと想定される。海況面では、今期の黒潮は大蛇行が継続し、黒潮内側反流は強弱を繰り返すと予測されており、熊野灘への暖水波及が期待できるものの、来遊量は前年を下回ると考えられる。

マジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2018（平成30）年1月～6月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2018（平成30）年級群）、1歳魚（2017（平成29）年級群）、
2歳魚（2016（平成28）年級群）、3歳（2015（平成27）年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南、宿毛湾・土佐湾は前年並。日向灘、豊後水道南部は前年を上回る。

(2) 魚体：いずれの海域も1歳魚が主体で、0歳魚が混じる。0歳魚は10 cm以下、1歳魚は15 cm～20 cm。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域西部は前年を下回る。紀伊水道外域東部、熊野灘は前年を上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部、熊野灘では1歳魚主体、紀伊水道外域東部は2歳魚～4歳魚主体。
1歳魚は14 cm～22 cm。2歳以上は20 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 魚体：1歳魚主体で15 cm～20 cm。

漁況の経過（2017年7月～11月）および見通し（2018年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが1997年以降減少した。2009年～2013年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.7億尾～7.3億尾と低い水準で推移している。現在の資源量は4万トン、親魚量が2万トンまで落ち込み、資源水準は低位、動向は減少と判断される。

2015年級群（3歳魚）の加入量は過去最低水準の2.7億尾と評価されている。近年の3歳魚の中でも、資源量水準は低く残存資源は少ない。

2016年級群（2歳魚）の加入量は低水準の3.7億尾と評価されており、残存資源は少ない。

2017年級群（1歳魚）は、後期（2017年7月～11月）の漁獲の主体となった。4月～11月の各県地先の漁獲状況を比較すると、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE、宇和島港ゼンゴCPUE、宿毛湾ゼンゴ資源量指数、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）は前年同期を上回り、伊勢湾豆板漁業当歳魚漁獲量、伊豆東岸定置網ジンダ漁獲量は前年同期を下回っている。各指数の相乗平均で比較すると、2014年～2016年を上回るが、2013年以前を下回る。したがって、低水準ではあるが、加入量は2016年級群を上回ると考えられる。

2018年級群（0歳魚）は、いずれの海域でも今期の後半に漁獲対象になるが、現時点では予測根拠となる情報は得られない。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに、前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚：14 cm以下、1歳魚：15 cm～20 cm、2歳魚：21 cm～24 cm、3歳以上：25 cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体で、2歳魚（2016年級群）も混じる。2017年7月～9月にかけて、当歳魚の漁獲は前年・平年を上回り、今期も継続すると考えられる。今期の来遊量は非常に好調であった前年並と予測される。

日向灘では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となる。2017年下半期の日向灘漁獲量、宇和海南部まき網漁獲量、宿毛湾まき網漁獲量を用いた指標値が前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となる。2017年下半期の大分県主要港での当歳魚の漁獲量が前年を上回ったことから、来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部東側では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体で、0歳魚（2018年級群）も混じる。2017年下半期の漁獲量が前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体で、0歳魚（2018年級群）も混じる。2017年下半期の定置網とまき網の漁獲状況から判断して、今期の来遊量は前年並と予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2017年下半期の漁獲量は前年並であった。同年上半期の漁獲量が近年としては特異的な好漁であったため、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、2歳魚～4歳魚（2014年級群～2016年級群）が漁獲の主体となる。2017年下半期の来遊量は前年・平年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。ただし、黒潮が離岸基調であり今後さらに離岸するようであれば、その影響で来遊量は減少する可能性はある。

熊野灘では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となる。まき網や定置網では、2017年の当歳魚の漁獲量が前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となる。前年下半期の当歳魚漁獲尾数と当年上半期の1歳魚漁獲尾数には正の関係が見られる。2017年の当歳魚漁獲尾数は低調であったが前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

西湘地区では、1歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となる。2017年の当歳魚漁獲量が低調であったが前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

(4) 房総～三陸南部海域の情報

房総～鹿島灘海域での北部まき網の2017年7月～11月の漁獲量は589トンとなり、前年を下回った。三陸南部～仙台湾では、宮城県の2017年7月～11月の漁獲量は422トンとなり、前年を下回った。岩手県の定置網では2017年7月～11月の漁獲量は69.5トンで、前年を下回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2018（平成30）年1月～6月）

対象海域：北薩～三陸海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：1歳魚（2017（平成29）年級群）、2歳魚（2016（平成28）年級群）、
3歳魚（2015（平成27）年級群）、4歳魚（2014（平成26）年級群）、
5歳（2013（平成25）年級群）以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするサバ類全体としては、北薩～日向灘では前年を下回る。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道南部東側～土佐湾では前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となる。北薩～日向灘では30 cm～38 cm（2歳魚、3歳魚）主体。豊後水道南部～土佐湾では25 cm～36 cm（1歳魚～3歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに紀伊水道外域西部では前年を下回り、紀伊水道外域東部では前年を上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは29 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体、ゴマサバは29 cm～36 cm（4歳以上）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは前年を上回る。ゴマサバは前年を下回る。サバ類全体としては前年並～上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に20 cm～30 cm（1歳魚）も漁獲される。ゴマサバは30 cm～40 cm（2歳以上）主体に漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を下回る。5歳以上は前年を上回る。マサバとしては前年並。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期・漁場：マサバは三宅島周辺海域が主漁場となる。盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域、銭洲周辺海域が主漁場となる。
- (3) 魚体：マサバは30 cm～34 cm（4歳魚、5歳魚）主体に27 cm～31 cm（3歳魚）、34 cm以上（6歳魚）も漁獲される。ゴマサバは28 cm～32 cm（2歳魚）主体に31 cm（3歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を下回る。5歳以上は前年を上回る。マサバとしては前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期・漁場：まき網では犬吠～常磐南部海域で期を通じて漁獲される。三陸南部海域の定置網では4月以降漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは、期前半は29 cm～32 cm（4歳魚、5歳魚）主体に、期後半は25 cm～31 cm（2歳魚、3歳魚）主体に漁獲される。ゴマサバは23 cm～32 cm（1歳魚、2歳魚）主体に漁獲される。

漁況の経過（2017年7月～11月）および見通し（2018年1月～6月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2004年以降の加入量水準の高い年級群の発生と漁獲圧の低下により資源量が増加している。

2012年級群（6歳魚）以上は、高齢となり残存資源量は少ないが、漁獲対象となる。

2013年級群（5歳魚）は、12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が129億尾と極めて高い水準であり、これまで各地の漁獲物の主体となっている。残存資源量は最近10年（以下、近年）の5歳魚としては多い。また、5歳魚としては平均体長・体重がかなり小さい。

2014年級群（4歳魚）は、推定加入量が20億尾と近年の平均（38億尾）を下回る水準であるが、これまで各地で2013年級群に次いで多く漁獲されている。また、4歳魚としては平均体長・体重が小さい。

2015年級群（3歳魚）は、推定加入量が42億尾と近年の平均程度の水準であるが、これまで漁獲は低調に推移している。また、3歳魚としては平均体長・体重が小さく、成熟割合が低くなると考えられる。

2016年級群（2歳魚）は、推定加入量が112億尾と極めて高い水準であるが、これまでの漁獲尾数は多くない。また、2歳魚としては平均体長・体重が小さく、成熟割合が低くなると考えられる。

2017年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均程度と推定されている。なお、秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）での出現率は42.9%、平均CPUEは325.0尾/網（暫定値）であり、CPUEは過去の同調査（17年間）において2013年級群に次いで高かった。

2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半から2014年まで高位水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2016年は中位水準と判断されている。

2013年級群（5歳魚）は、12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が5.9億尾と近年の平均（8.7億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2014年級群（4歳魚）は、推定加入量が8.5億尾と近年の平均程度の水準である。

2015年級群（3歳魚）は、推定加入量が3.7億尾と近年の平均を下回る水準である。

2016年級群（2歳魚）は、推定加入量が4.2億尾と近年の平均を下回る水準である。

2017年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均程度と推定されている。しかし、静岡県棒受網CPUEによる資源密度指数（0歳時11月までの累計値）は74であり、2016年（2,342）を大きく下回っている。また、三陸～道東海域流し網調査のCPUEは2015年・2016年に引き続き低い値を示した。このため推定加入量の不確実性は大きい。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1歳魚（2017年級群）は近年の平均程度の加入量水準と推定され、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2016年級群）は2013年級群に次ぐ高い加入量水準であり、来遊量は前年を上回る。3歳魚（2015年級群）は近年の平均程度の加入量水準であり、来遊量は前年を上回る。4歳魚（2014年級群）は近年の平均を下回る加入量水準であり、来遊量は前年を下回る。5歳魚

(2013 年級群) は近年では卓越して高い加入量水準であり、来遊量は前年を上回る。6 歳 (2012 年級群) 以上は残存資源量が少なくなっているが、漁獲対象となる。マサバの来遊量は海域によって異なり、伊豆諸島以北では前年並、熊野灘～紀伊水道外域東側では前年を上回り、紀伊水道外域西側以西では低水準となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

まき網漁場は、7 月中旬までは鹿島灘～常磐南部海域に漁場が形成され、7 月下旬からは八戸沖にも漁場が形成された。その後も継続して八戸沖に漁場が形成されたが、漁獲はまとまらず低調であった。一方、道東沖では 9 月下旬と 10 月中旬・下旬に漁場が散発的に形成された。その後、10 月下旬には三陸北部海域、11 月上旬には三陸南部海域、11 月中旬には金華山周辺、11 月下旬には常磐沖にも漁場が形成された。7 月～11 月の犬吠以北海域におけるまき網による漁獲量は 7.8 万トンと前年同期 (10.3 万トン) を下回った。千葉県以北の定置網等による漁獲量は 4.2 千トンと前年同期 (5.1 千トン) 並であった。伊豆諸島以西の海域における漁獲量は 5.4 千トン (前年同期 3.1 千トン) であった。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、犬吠以北海域では、犬吠～常磐南部海域が主漁場となり、期前半は 4 歳魚、5 歳魚主体、期後半は 2 歳魚、3 歳魚主体となる。伊豆諸島周辺海域では、4 歳魚、5 歳魚主体に 3 歳魚、6 歳魚も混じる。漁場形成は黒潮流路変動に強く影響される。黒潮流路は A 型で推移し、伊豆諸島海域付近を北上すると予測されており、三宅島周辺海域に漁場が形成される。盛漁期には銭洲周辺海域にも漁場が形成される。熊野灘～紀伊水道外域ではマサバ主体の漁場形成もみられ、2 歳以上が主体となる。土佐湾～北薩ではゴマサバに混獲される程度となる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1 歳魚 (2017 年級群) : 26 cm 以下、2 歳魚 (2016 年級群) : 25 cm～28 cm、3 歳魚 (2015 年級群) : 27 cm～31 cm、4 歳魚 (2014 年級群) : 29 cm～32 cm、5 歳魚 (2013 年級群) : 29 cm～34 cm、6 歳 (2012 年級群) 以上 : 33 cm 以上。(各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている)

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態を基にすると、1 歳魚 (2017 年級群) は近年の平均程度の加入量水準と推定され、来遊量は前年を上回る。2 歳魚 (2016 年級群) は近年の平均を下回る加入量水準であるが、1 歳魚としての漁獲は少なかった前年同期を上回っており、来遊量は前年を上回る。3 歳魚 (2015 年級群) は近年の平均を下回る加入量水準であり、来遊量は前年を下回る。4 歳 (2014 年級群) 以上は残存資源量が少なくなっているが、漁獲対象となる。ゴマサバの来遊量は海域によって異なり、日向灘、紀伊水道外域西側、熊野灘、伊豆諸島周辺海域では前年を下回り、北薩～薩南、豊後水道南部東側～土佐湾では前年並、豊後水道南部西側、紀伊水道外域東側では前年を上回る。犬吠以北海域では混獲される程度にとどまる。

(2) 漁期・漁場、魚体

7 月～11 月の漁況は、北薩～豊後水道南部、紀伊水道外域東側では前年を上回り、土佐湾では前年並、紀伊水道外域西側、熊野灘～犬吠以北海域では前年を下回った。7 月～11 月の漁獲量は、北薩～紀伊水道外域は 10.3 千トン (前年同期 5.5 千トン)、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は 3.9 千トン (同 10.2 千トン)、犬吠以北海域のまき網は 1.5 千トン (同 2.6 千トン)、千葉県以北の定置網などが 5.6 千トン (同 10.7 千トン) であった。(漁獲量は各地主要港水揚資料および水揚物標本測定結果等からの推定値)

本予測期間における各地の漁期・漁場および魚体は、北薩～日向灘では 2 歳魚、3 歳魚主体、豊後

水道南部～土佐湾では1歳魚～3歳魚主体、紀伊水道外域では4歳以上主体、熊野灘では2歳以上主体に、期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では2歳魚主体に3歳以上も混じり、期を通じて三宅島周辺海域、銭洲周辺海域が主漁場となる。犬吠以北海域では1歳魚、2歳魚主体に犬吠海域～鹿島灘で漁獲される。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚（2017年級群）：30 cm 以下、2歳魚（2016年級群）：28 cm～34 cm、3歳魚（2015年級群）：30 cm～37 cm、4歳魚（2014年級群）：32 cm～38 cm、5歳（2013年級群）以上：33 cm 以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関)
三重県水産研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所